

記念大会を終えて

—情報処理学会創立 50 周年記念 (第72回)全国大会速報—



東京大学本郷キャンパス
にて開催された



萩谷昌己 (東京大学／全国大会実行委員長)

情 報処理学会創立 50 周年記念 (第 72 回) 全国大会は、2010 年 3 月 8 日から 12 日まで、東京大学の本郷キャンパスで行われた。大会の本体は 9 日から 11 日までであるが、8 日にはプレイベント、12 日にはポストイベントが開催され、その会期の長さもさることながら、あらゆる点において記録的な大会となった。

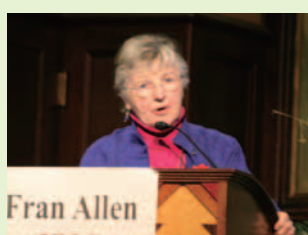
第 1 に、7,150 という参加者数が達成された。第 62 ～ 71 回の参加者数の平均が 2,282 であることを考えると、この数字は驚異的なものであるといわざるを得ない。おそらく、この数字は近い将来において破られないのではないと思われる。もちろん、破られてほしいものだが。

第 2 に、言語処理学会との共催、ソフトウェアジャンルの併設、プレイベントとポストイベントの新設など、従来の全国大会を超えた枠組みによる開催となったことである。

第 3 に、以上の結果として、東大の本郷キャンパスをフルに活用した全国大会になったことである。当初、大型のイベントは安田講堂、山上会館、小柴ホールなどで開催し、一般・学生セッションは工学部と理学部の建物を活用して開催することを計画していた。

ところが、言語処理学会との共催とソフトウェアジャンルの併設が決まり、また、多くのイベント企画が立案されるにつれ、必要なイベント会場の数はうなぎのぼりに増えていった。そのため、上述の建物に加えて、法文 1 号館、赤門総合研究棟、福武ラーニングシアターなどの大教室やホールが会場として追加された。結果として、本大会が本郷キャンパス全体を覆うような状況になり、大学全体における本大会のプレゼンスは非常に大きなものとなった。具体的に、筆者は 10 日の朝に部局長が集まる全学の委員会に出席したのだが、会議前の雑談は、本大会のうわさで持ちきりだったのである。

特に、普段は法学部の昔ながらの講義が行われている法文 1 号館の 25 番教室における「CGM の現在と未来：初音ミク、ニコニコ動画、ピアプロの切り拓いた世界」は、本大会を象徴するイベントであった。普段はプロジェクトもネットワークもないこの会場から配信されたイベントの様子を、ネットワークを通して「長い時間しっかりと視聴された方」は、約 700 名に達したそうである。この数は会場の参加者数とほぼ同程度だったという。そして、法文 1 号館の会場では、入場制限をするほどの混



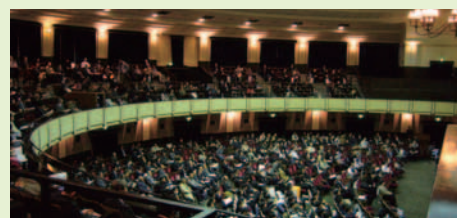
招待講演の様子(安田講堂) 左上：濱田純一氏 右上：Fran Allen 氏
左下：Jim Isaak 氏 右下：小宮山宏氏

大会総合受付とデモ展示



CHANGE! Yes, we can! (理学部 1 号館)

安田講堂の様子



情報処理技術遺産認定式(小柴ホール)



ソフトウェアジャパン 2010 (安田講堂)



今ドキッの IT (御殿下記念館)



情報処理グランド
チャレンジ
(法文 1 号館)



3 月 10 日は東
大合格発表の
日でもあった

CGM の現在と未来(法文 1 号館)



理数系人材
育成プログラム
(工学部新 2 号館)



情報処理の「夢」(情報処理学会会長セッション) (安田講堂)

乱が生じた。よい意味で。

第 4 に、これも会場に関することであるが、御殿下記念館を活用して「今ドキッの IT」展示が行われた。普段は学生や教員の運動の場として使われている施設であるが、実行委員会のウルトラ C 的な技により、本大会のイベントのために利用することが可能となった。実は、本郷というキャンパスにおいて、大きなイベントを開催することが可能な巨大なオープンスペースは、この御殿下記念館以外にはなかったのである。

実際に、「今ドキッの IT」展示では、巨大なスペースを活かした数々のイベントが開催されたが、特に、ロボテックをはじめとして、学生や東大の合格発表に来た高校生など、若い人たちの参加・見学が目立っていた。

第 5 に、いま述べたように、3 月 10 日は東大の合格発表の日であった。毎年この日の本郷キャンパスはお祭りのようになるのだが、その中での本大会の開催であったため、お祭りはますます賑やかになり、本大会への参加者数もますます増えることとなった。

第 6 に、開催校である東大の現総長と前総長から講演をいただいたことも忘れてはならない。

以上に述べたことのほかに、特にソフト面でもさまざまな工夫が行われた。たとえば、聴講参加は無料としたこと、卒論・修論の学会推奨認定制度を導入したことなどである。

このようなさまざまな工夫と努力の結果として、60

以上という膨大なイベントが、上述した膨大な数の会場に割り付けられた。このこと自体が、プログラム委員会の大変な作業であったそうである。限られた紙面なので、その 60 以上の個々のイベントについてここで取り上げることはいくつかできない。

現総長と前総長の講演については触れたが、その他、Fran Allen 先生による招待講演「The Challenge of the Multicores」は非常に示唆に富んだものであったという。また、3 人のプログラム委員長のご尽力された「情報処理の『夢』」「情報処理グランドチャレンジ」「ソフトウェアジャパン 2010」の成功はここに記録としてとどめさせていただきたい。

本大会全体を通じて、喜連川組織委員長(副会長)の企画力・組織力・実行力には目を見張るものがあり、世界的な研究開発を先導されてきた方が全国大会をやると、こうなるものかという驚嘆を感じ得ずにはいられない。

喜連川委員長の『ちょっと「元気感」が得られた』というお言葉があるが、情報分野全体がいただいた大きな元気感は未長く続きそうである。というのも、ちょうど東大の合格発表と重なった本大会には、合格発表に来ていた高校生たちも含めて、多くの若い人たちの参加があった。本大会で元気感を共有した若い人たちが、今後の情報分野にさらなる元気を与えてくれると大いに期待できるからである。

(平成 22 年 4 月 8 日受付)